『紅葉を訪ねて:　宝徳寺』

桐生・宝徳寺散策報告(2022 年 11 月 17 日(木))

偶々、桐生市の「宝徳寺の床紅葉」を見つけたので、10 月の例会で提案したら、実施が決まった。10 月下旬からと 11 月中旬以降の前後期に分かれていたが、後期にしようということになり、晴れの日を狙って今日となった。参加者は段々と増え結局、伊藤、浮津、神田、三浦、陽田の 5 名となった。

桐生市は東京から埼玉県→茨城県→栃木県→群馬県と一都四県の走り抜ける長距離コースになる。東京駅発 7 時47分の「快速ラピット号」で小山駅に向う、丁度東京駅ホームで神田さんと合流した。新宿から乗車する伊藤さん達は、赤羽駅からこの電車に乗車するものと考えていたので、小山駅の両毛線ホームになかなか現れないのでいささか焦ってしまったが、発車 5 分前に現れ全員集合した。

桐生駅からのバスは市の「コミュニティーバス」で「おりひめ号」と云い、昔から作られている絹織物を織る「織り姫」から名付けられた。約 20 分の乗車でも¥200 という均一低料金で、桐生市民の税金のお陰で有難いことだ。

「宝徳寺」はバスを降りると少し坂を登った直ぐ目の前だ。丁度大型バス一台分の観光客が入った直後で、それほど広くはない本堂(28 畳敷という)に入るのに、約 10 分も行列する羽目になった。本堂では、案内の人が数名いて、「撮影のポイントは正面のご本尊の前と真横の位置で、腹這いになって低い位置で撮影しなさい。撮ったら次の人に場所を空けて下さい!」と叫んでいた。

我々も早々に本堂を追い出されたが、本堂前の白砂に岩を数個配した枯山水も程々に綺麗だった。塀の外の紅葉した木々は、赤、黄色の配色で素晴らしかった。ただ木々の天辺の葉は無く、若干遅いという感じだった。贅沢言うまい。紅葉の木々の下には、「地蔵のこみち」と称して、一人又は二人連れの小さなお地蔵さんが丸い帽子を被って我々を迎えてくれた。少し上がった広場には、「アンブレラスカイ」と称して、沢山の赤、白、黄色などのビニール傘が中空にぶらされられていて、一種の雰囲気を醸し出していた。

境内から出口に向かうと、幟を立てた焼き芋や甘酒を売る店が並んでいる、12 時になったので、昼食を摂ろうと考えたが、ベンチは少なく、適当な場所が無い。桐生駅に戻るバスは 13 時 45 分まで無いのだ。止む無くバス道を少し上流側に歩いて場所を探すことにした。少し歩いた処で「うどん」の幟を立てた小さな店を見つけたので、ここでトグロを巻くことにした。よく見たら「田村とうふ店」とあった。店は土間にテーブル一つ、上の室にテーブル 2 台の小さな店だった。店の親父さんが上の室に上がれという、本来履物を脱ぐのだが、我々の渋面に気が付いたのか、「そのまま上がってもいいよ」と。メニューは、天ぷらうどん、そば、とうふきりない、しかも今は“天ぷらうどん”¥500 円のみと。皆さんそれを注文した。早速ビール2本を注文して乾杯、一方うどんは親父一人で作っているので、1～2 人分ずつ順番に出てくる。若干腰は弱いが味は良かった。誰かさんが「福岡のうどんも腰が弱いよ」と教えてくれた。うどんも手切りなので、きしめんよりも幅広が紛れて入っていたが、これもご愛敬。うどんが無くなったが、まだ 13 時、バス時刻までタップリ時間がある。お酒は無いのと訊いたら、親父さん「酒はないが、俺が晩酌で飲んでいる焼酎ならあるよ」と、2 リットルペットボトルに 4 割程残ったものを出してくれた。氷が欲しい、お湯割りにするなど勝手な注文をしたのだった。12 月、1 月の計画が幾つか紹介され、また浮津さんが「もう脚の痛みが取れたので、来年からは山歩きにも参加したい」という嬉しい話だった。5 分前に勘定してもらったが、¥4,700 円と。色々サービスしてのこの料金に、浮津さんなど大感激。

バスは予定時刻より少し早く駅に到着したので、一本早い電車に乗ることができた。乗車前に三浦さん、またア

ルコール飲料を買いたそうだったのだが、浮津さんから「もういいでしょう」とたしなめられて、電車の中では何か手持無沙汰のご様子だった。久喜で新宿組と上野組に分かれて解散した。

以上　陽田

ご本尊様前から石庭の方を向いて眺めた「床紅葉」

横から観た「床紅葉」

庭の紅葉の木々

「アンブレラスカイ」

本堂前で“証拠写真”